

教員養成課程における音楽理論講義の一考察

—ピアノレッスン経験者と未経験者の差異について

鈴木 由美子*

On a Study for Music Theory Class in the Teacher Training Program — Difference between Experienced and Inexperienced Students of Piano Lessons

Yumiko SUZUKI

概要

保育の現場でのピアノの重要性は広く認識されており、保育者養成・小学校教員養成の大学・短期大学での教育カリキュラムの中でもピアノの指導法は大きな重みを持っている。音楽理論の講義は、ピアノ指導法の理論的な基礎を教育する科目として位置付けられている。近年、幼少期からピアノのレッスンを受ける子供が減少しており、保育者養成の大学・短期大学に入学する学生も、入学前にピアノのレッスンを受けた経験が皆無かごく少ない者が増加している。このような中で、入学前のレッスン経験がある学生と、ない学生との間で、音楽理論の講義内容の理解と、音楽理論の目標の一つである読譜について、差があるかどうかを定量的に把握するためにアンケート調査を行った。

アンケートは2016年度名古屋女子大学文学部児童教育学科児童教育学専攻1年生Bクラスの、「音楽理論」を受講している50名を対象に行った。アンケートの分析対象者は48名で、そのうちピアノのレッスンの経験者は31名、未経験者は17名である。アンケートは、理解度などを4択式で回答する項目と、ピアノのレッスンの経験年数などを回答する項目からなっている。ピアノのレッスン経験の有無で学生を2つのグループに分け、4択式の回答から、理解が不足した2つの選択肢を回答した学生を理解不足の学生とみなして、それぞれのグループについて、その割合を計算した。これらの割合について、統計的な検定をおこなった。その結果、講義の理解度に関連した19項目のうち、12項目で統計的に差があることがわかった。すなわち、入学前のピアノのレッスン経験の有無が音楽理論の講義内容の理解に大きな影響を与えていることがわかった。このことから、入学前のレッスンの未経験者にたいして、音楽理論の指導方法を工夫する必要があることを示した。

1. はじめに

児童教育学科における音楽理論の講義は、カリキュラムの中で、ピアノの指導法と並んで重要な科目と位置付けられている。ところが、昨年著者のアンケート調査によると、保育の現

* 非常勤講師

場で働いている人の間では、学生時代に学んだ音楽理論の講義はあまり役立たなかったという人がいることがわかった。そのような人の特徴として、大学もしくは短期大学入学前にピアノのレッスン経験がないことがあった(鈴木 2017)。(鈴木 2107)で行ったアンケートでは、対象人数が少なく、データからだけでは統計的に有意かどうかは判断することができなかった。そこで、本研究では、音楽理論の講義の受講生を対象として、音楽理論についての考察を行うことにした。

保育の現場でのピアノの重要性は広く認識されており、音楽理論の講義はその理論的な基礎を教育する科目として位置付けられている。そのため、保育者養成の大学・短期大学での教育カリキュラムの中でも大きな重みを持っている。ところが、その重要性にもかかわらず、音楽理論の教育の効果についての論文は少なく、その重要性から鑑みてさらなる研究が必要だと考えられる。本研究では、音楽理論の講義でアンケートを行い、音楽理論の理解度について調査を行った。このアンケートでは、大学入学前のピアノのレッスン経験の有無が、講義の内容の理解度に関係しているかを調べるための質問を行った。近年、幼少期からピアノのレッスンを受ける子供が減少しており(本間 2012、吉村ら 2015)、保育者養成の大学・短期大学に入学する学生も、入学前にピアノのレッスンを受けた経験が皆無かごく少ない者が増加している。これらの入学前のピアノのレッスン経験の差が、音楽理論の内容の理解に影響を与えているかをこのアンケート調査で明らかにする。

アンケートは2016年度名古屋女子大学文学部児童教育学科児童教育学専攻1年生Bクラスの「音楽理論」の講義を受講している50名に対して実施した。アンケートは、4択式で回答する項目と、大学入学前のピアノのレッスン経験の年数、ピアノのレッスンを開始した年齢を聞く項目からなっている。1年でもレッスンを受けているものを経験者、レッスン経験年数0のものを未経験者とした。また、電子オルガンのレッスンを受けているものは経験者、吹奏楽・軽音楽の経験者は未経験者に分類した。以降、これらを経験者、未経験者と呼ぶことにする。アンケートの回答者のうち、経験者をグループ1、未経験者をグループ2として2つのグループに分け、2つのグループの間で講義内容の理解の程度などについての回答に差があるかどうかを統計的に検定した。

このような検定は比率の検定と呼ばれ、帰無仮説として、グループ1とグループ2の間に差がないとして、95%と90%の棄却率で、帰無仮説が棄却されるかどうかを調べた。帰無仮説が棄却された場合、それぞれ95%、もしくは90%の確率で、経験者と未経験者の間で差があるということが言える。音楽理論の理解度については、4択式の回答のうち、理解度については、理解度の低い2つの選択肢を回答した割合を、その他は4択式のうち、ポジティブな2つの選択肢を回答した割合を、各グループについて計算し、その差を検定した。

検定結果によると、講義の内容に関する19項目の質問のうち、12項目で統計的に有意となった。このことは、音楽理論の講義において、未経験者にたいして特別な配慮が必要なことを示唆している。

第2節ではアンケートの詳細について、第3節ではアンケートの分析について、第4節では音楽理論の講義へのフィードバック、第5節では、まとめと今後の課題について述べる。

2. 音楽理論の講義で実施したアンケート

音楽理論の講義の内容の理解度、楽譜を読むことの得意さ、音楽理論を受けてのピアノの実技の上達の度合いが、入学前のピアノレッスン経験の有無と関係があるかを調査するために表1のようなアンケートを行った。アンケート対象者は2016年度開講の文学部児童教育学科児童教育学専攻1年生Bクラスの「音楽理論」の登録者50名である。講義の登録者のうち、アンケートを行った講義に欠席した者が1名いた。またアンケート当日は出席していたが、アンケートを取る講義までの2/3を欠席していた学生1名はアンケート結果の分析から除いた。これは、講義の理解度について正しい回答ができないと考えたからである。その結果、アンケートの分析対象となったのは48名となった。この48名のアンケート回収率は100%であった。アンケート対象者のなかで、経験者は31名、未経験者は17名である。前述のように経験者をグループ1、未経験者をグループ2と呼ぶことにする。アンケート実施日は2016年12月21日である。

表1 アンケートの項目

音楽理論の講義についてお聞きします。

(1) 「音程」は理解しましたか。

ア よくわかった イ わかった ウ 少しはわかった エ わからなかった

(1) - 1 全音・半音・度数の数え方は理解しましたか。

ア よくわかった イ わかった ウ 少しはわかった エ わからなかった

(1) - 2 完全音程・長短音程は理解しましたか。

ア よくわかった イ わかった ウ 少しはわかった エ わからなかった

(1) - 3 音程の増減を理解しましたか。

ア よくわかった イ わかった ウ 少しはわかった エ わからなかった

(2) 「音階」は理解しましたか。

ア よくわかった イ わかった ウ 少しはわかった エ わからなかった

(2) - 1 調号と主音を理解しましたか。

ア よくわかった イ わかった ウ 少しはわかった エ わからなかった

(2) - 2 長音階を理解しましたか。

ア よくわかった イ わかった ウ 少しはわかった エ わからなかった

(2) - 3 短音階を理解しましたか。

ア よくわかった イ わかった ウ 少しはわかった エ わからなかった

(2) - 4 平行調・同主調・下屬調・属調・近親調を理解しましたか。

ア よくわかった イ わかった ウ 少しはわかった エ わからなかった

(3) 「和音」は理解しましたか。

ア よくわかった イ わかった ウ 少しはわかった エ わからなかった

(3) - 1 主要三和音と属七の和音を理解しましたか。

ア よくわかった イ わかった ウ 少しはわかった エ わからなかった

(3) - 2 和音の基本形、転回形を理解しましたか。

ア よくわかった イ わかった ウ 少しはわかった エ わからなかった

(3) - 3 和音記号 (I・IV・V・V₇) とコードネームは理解しましたか。

ア よくわかった イ わかった ウ 少しはわかった エ わからなかった

(4) 「伴奏付け」を理解しましたか。

ア よくわかった イ わかった ウ 少しはわかった エ わからなかった

(5) 音符、休符、音名、拍子、反復記号、楽語を理解しましたか。

ア よくわかった イ わかった ウ 少しはわかった エ わからなかった

(6) 記譜 (ト音記号、ヘ音記号、調号、音符、音階を五線に書くこと) は理解しましたか。

ア よくわかった イ わかった ウ 少しはわかった エ わからなかった

(7) 楽譜を読むことは得意ですか。

ア 得意 イ まあまあ得意 ウ あまり得意ではない エ 得意ではない

(8) 楽譜を読む時に音楽理論の講義で学んだことが役に立ちますか

ア とても役にたつ イ 役にたつ ウ 少しは役にたつ エ 役に立たない

(9) 音楽理論の講義を受けてピアノ実技、弾き歌いが進歩しましたか。

ア かなり進歩した イ 進歩した ウ 少しは進歩した エ 進歩しない

音楽経験についてお聞きます。

(10) ピアノを習い始めた年齢を教えてください

才

(11) 大学入学前にピアノを習っていた年数を教えてください

年

(12) ピアノを習う以外の音楽活動 (電子オルガン、合唱、吹奏楽など) があれば活動内容と年数を教えてください。

活動内容:

年

アンケートの項目のうち、(1)～(6)は講義内容の理解度を問うものである。項目(7)～(8)は読譜に関して問うものである。(9)は音楽理論の講義が実技に役立ったかどうかを問うものである。(7)～(9)は音楽理論の講義に対する総合的な評価と考えることができる。(10)～(12)は大学入学前のピアノレッスン・そのほかの音楽活動の有無を問うものである。今回のアンケートでは、ピアノのレッスン経験のない学生で、音楽活動をしている学生は2名いたが、前述のように電子オルガンの経験者を経験者に、軽音楽の経験者を未経験者に分類した。

アンケートの意図は、大学入学前のピアノのレッスンの経験の有無が、音楽理論の内容の理解度などに影響を与えるかどうかを浮き彫りにすることである。その結果、影響があれば、未経験者に対する音楽理論の講義の進め方で、未経験者に入念に教えるべきところがあるかどうか明らかになり、音楽理論の講義を改善することができる。以上のような意図で行ったアンケートについて、次節で分析を行う。

3. アンケートの分析

アンケートを分析するにあたって、4択の回答（ア）～（エ）を4から1に割り当てた。これにより、理解度が高い場合には、高い数値が割り振られることになる。これは、回答を数値化するためである。そのうえで、グループ1とグループ2について、各項目に1、もしくは2と答えた人数の割合を計算した。これらを p_1 、 p_2 とあらわす。すなわち、理解度については、理解度が低く、読譜については不得意、音楽理論を受けて実技が上達しなかった人数の割合をそれぞれ計算したことになる。その結果を表2に示す。

表2において、列 p_1 、 p_2 はグループ1とグループ2の学生の中で、理解が不十分な学生の割合を示している。これについて、2つのグループの間で差があるかどうかを統計的に検定したのが、次列の検定結果である。検定は、 p_1 、 p_2 についての比の検定を行った。帰無仮説は、「グループ1とグループ2の間に差がない」であり、片側95%、片側90%で検定を行った。表2の検定結果で「**」は95%で有意、「*」は90%で有意な項目を表している。

アンケート結果で（2）-4 平行調・同主調・下屬調・属調・近親調を理解しましたか。（9）音楽理論の講義を受けてピアノ実技、弾き歌いが進歩しましたか。の2項目以外は、グループ1の平均値が高かった。このことは、全体の傾向として、グループ1のほうがグループ2より講義の内容等について、理解度などが高くなっていることを示している。統計的な検定によると、これらの項目のうち12項目について有意であった。（2）-4、（9）の2項目については、グループ2の平均値が高かったが、統計的には有意ではなかった。

具体的には、（1）「音程」の理解、特に（1）-1の全音、半音、度数の数え方、（2）の「音階」、特に（2）-2、（2）-3の長音階・短音階の理解、（3）「和音」の理解、（5）「音符、休符、音名、拍子、反復記号、楽後」の理解、（6）記譜の理解、（7）楽譜を読むこと、（8）「楽譜を読むときに音楽理論が役立ったか」の10項目については、グループ1とグループ2の間の差について、95%で帰無仮説が棄却される。より緩やかな90%の基準では、（3）-2の和音の基本形、転回形、（3）-3の和音記号とコードネームの関係の2項目が棄却される。これらの12項目については、経験者と未経験者の間の割合に差があることが統計的に示された。すなわち、これらの項目については、経験者と未経験者の間に理解度などに差があることがわかる。

講義内容の19項目中12項目に関して、経験者と未経験者の間に差があることは、音楽理論の講義の教育方法、すなわち授業内容や指導法に関して工夫すべき点があることを示唆していると考えられる。教育方法についての考察は次節で行い、あわせて講義の教育方法についても考えられる可能性を指摘する。これらについては、筆者の講義の経験に基づいている点もあり、あくまでも可能性の域を出ない面もあるが、講義の教育方法について、可能な限り実現可能な方法を指摘する。

表2 アンケート項目の比の検定

アンケート項目	p_1	p_2	検定結果
(1) 「音程」は理解しましたか。	0.06	0.24	**
(1) - 1 全音・半音・度数の数え方は理解しましたか。	0.06	0.18	**
(1) - 2 完全音程・長短音程は理解しましたか。	0.1	0.18	
(1) - 3 音程の増減を理解しましたか。	0.1	0.18	
(2) 「音階」は理解しましたか。	0.13	0.29	**
(2) - 1 調号と主音を理解しましたか。	0.19	0.29	
(2) - 2 長音階を理解しましたか。	0.19	0.47	**
(2) - 3 短音階を理解しましたか。	0.19	0.53	**
(2) - 4 平行調・同主調・下屬調・属調・近親調を理解しましたか。	0.29	0.24	
(3) 「和音」は理解しましたか。	0.23	0.47	**
(3) - 1 主要三和音と属七の和音を理解しましたか。	0.29	0.41	
(3) - 2 和音の基本形、転回形を理解しましたか。	0.29	0.47	*
(3) - 3 和音記号 (I・IV・V・V ₇) とコードネームは理解しましたか。	0.39	0.59	*
(4) 「伴奏付け」を理解しましたか。	0.52	0.65	
(5) 音符、休符、音名、拍子、反復記号、楽語を理解しましたか。	0.32	0.59	**
(6) 記譜 (ト音記号、ヘ音記号、調号、音符、音階を五線に書くこと) は理解しましたか。	0.1	0.47	**
(7) 楽譜を読むことは得意ですか。	0.32	1	**
(8) 楽譜を読む時に音楽理論の講義で学んだことが役に立ちますか	0.42	0.71	**
(9) 音楽理論の講義を受けてピアノ実技、弾き歌いが進歩しましたか。	0.55	0.59	

4. 音楽理論の講義内容の教育方法に関する考察

前節での知見を踏まえて、大学での音楽理論の講義内容の理解度の差について、統計的に有意であった項目それぞれについて、その差の原因と対策について考察する。2016年度後期、著者が担当した音楽理論の講義の内容は、以下のようである。

- ・音程 (度数の数え方、完全1度、完全8度、完全4度、増4度、完全5度、減5度)
- ・音程 (派生音を含む音程)
- ・長音階 (ハ・ヘ・ト・ニ長調、音階名の名称) # bの順番
- ・音階 (派生音を含む音程)
- ・短音階 (イ・ハ短調、自然短音階、和声的短音階、旋律的短音階、平行調、同主調)
- ・和音 (ハ・ヘ・ト・ニ長調、主要三音階の基本形、属調、下屬調)

- ・和音（和音の機能、転回形、ハ・ヘ・ト・ニ長調のI IV V伴奏形）
- ・和音（V₇、I IV Vを含めた伴奏付け）
- ・伴奏付け、移調
- ・コードネーム（コードネームの種類と表記）
- ・コードネーム（コードネームによる伴奏付け）

この中で、ピアノレッスンの未経験者が経験者より理解が行き届かないと統計的に示されたのは、以下の内容である。

- ・音程
- ・音階、特に長音階、短音階
- ・和音
- ・音符、休符、音名、拍子、反復記号、楽語

さらに、総合的な力として

- ・記譜の理解
- ・読譜

の合わせて6項目について未経験者のほうが経験者より理解度が低く、不得意と回答している。これらの知見からは、音楽理論の講義として、ほとんどの内容について、未経験者については配慮が必要とわかる。以下に各項目について具体的に説明する。

「音程」については、全体的には理解できた学生が多いが、その中でも未経験者のほうが理解できない割合が高い。特に、全音・半音・度数の数え方のような基本的な内容について、未経験者の25%近くが、理解が不足していることは、驚くべきことである。これは、未経験者は楽譜に対する苦手意識があるのではないかと考えられる。経験者は、講義を受ける前にピアノのレッスンを通じて楽譜に接する時間が長いので、ある程度音程という概念を肌で理解しており、未経験者が持つ苦手意識を克服しているのではないかと考えられる。講義としては、未経験者が音程の教育内容のどの部分について理解するのが難しかったかをさらに詳しく調べる必要がある。未経験者は、ピアノの実技を前期の半年間しか行っておらず、前述に苦手意識を克服する時間が短く、さらにピアノの実技と結びつけた理解ができない可能性もある。

「音階」については、音程よりも理解した学生の割合は低いものの、それでも80%程度の学生が理解している。ただし、その中で、長音階と短音階については、未経験者の50%程度が理解できていない。前述の音程についてと同様に、未経験者は、音楽理論の講義の前にピアノの実技を半年間しか行っておらず、実技と結びつけた理解が不足している可能性がある。詳しい理由はさらなる調査を待たなければならないが、当面は、特に未経験者については、長音階、短音階について、理解を確かめながら講義を進めていくべきである。

「和音」については、さらに理解した学生の割合が低くなっている。未経験者の半数近くが理解していない。それは、音程、音階の理解度が低いと、和音についても理解が行き届かないことが原因であると考えられる。特に、未経験者にとっては、音程、音階の理解度が低いまま、和音について学んでも理解が出来なかったと考えられる。特に、和音の基本形、転回形は、未経験者にとっては、初めて接する内容だと考えられる。そのため、理解が不足したと考えられる。和音記号とコードネームについては、もともと難しい概念である上に、前述のような経験不足から、理解が不足したと考えられる。これについてもより詳しい調査が必要であるが、当面は、特に未経験者について、和音についての理解を確かめながら講義を進めていくほかはない。

「音符、休符、音名、拍子、反復記号、楽語」については、さらに理解した学生の割合は低くなり、特に未経験者は60%近くが理解していない。ただし、質問の範囲が広く、何について理解できていないかが不明である。これらについても、より詳しい調査をして、どの内容について教育方法を工夫するかを考えなくてはならない。

「記譜」については、経験者の90%が理解しているのに対して、未経験者の半数が理解していない。教える側が暗黙のうちに、学生がある程度の予備知識を持っているという前提で教えているかもしれない。未経験者にとっては、音程、音階、和音と理解が不足したままで、さらに楽譜にも慣れない中で、記譜の理解が進まなかったと考えられる。

今までの項目の結果を反映して、「楽譜を読むこと」に関しては、経験者の32%が得意としているのに対して、未経験者の実に全員が不得意としている。楽譜を読むことは、音楽理論の目標の一つであるので、このことは、音楽理論の講義内容と教育方法について、未経験者に対しては、改善すべき点があることを示している。さらに、「楽譜を読むことに関して、音楽理論の講義が役立っている」としたものは経験者でも42%、未経験者では71%となっており、その証左となっている。

「音楽理論の講義を受けて実技が進歩したか」という項目については、経験者、未経験者ともに55%以上が、進歩していないと回答している。経験者と未経験者との間にはその割合は差がなく、全体として、学生は、音楽理論が実技に役立たないと感じているようである。

著者はピアノの実技教育においても経験者と未経験者の違いを指摘したが（鈴木 2017）、音楽理論についても同様の知見が得られた。このことから、講義自体を経験者と未経験者に分けて行うことの可能性も、音楽理論の内容を学生に理解させ、ピアノ教育を充実させるためには考慮する必要があるだろう。

5. おわりに

音楽理論の講義の改善のために、経験者と未経験者で講義内容の理解に差異があるかどうかを調べるアンケートを名古屋女子大学文学部児童教育学科児童教育学専攻1年生のうち、2016年後期「音楽理論」Bクラス受講者に対して行った。アンケートの分析対象者は48名、そのうち、経験者は31名、未経験者は18名であった。アンケートの統計的な分析の結果、入学前のピアノのレッスン経験が音楽理論の内容の理解に大きな差異を与えていることがわかった。大学での音楽理論の講義について、入学前のレッスン経験によって、指導法を工夫する必要性を指摘した。

今回のアンケート分析対象者の人数は48名で、統計的には十分な数と考えられるが、より大きな規模でアンケートを行えば、より詳しい分析が行える。しかしながら、現段階でも示唆に富んだ知見が得られた。今後、さらにアンケートの対象者の人数を増やして今回得られた知見を確認し、質問項目も増やして、より詳しいアンケート調査を行うことで、精度を高め、得られた知見を講義の教育方法に活用することが考えられる。これは今後の課題としたい。

謝辞

アンケートに協力してくれた学生の皆様に感謝します。アンケートの統計分析については南山大学理工学部鈴木敦夫教授に助言を受けたのでここに感謝します。

参考文献

- [1] 本間千尋：日本におけるピアノ文化の普及—高度経済成長期の大衆文化を中心として—、慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要、No.74 (2012)、pp.33-54.
- [2] 鈴木由美子：保育者を目指す学生へのピアノ指導法の一考察、名古屋女子大学紀要、第63号 (2017)、pp.359-368.
- [3] 吉村淳子、芝崎美和：保育者養成におけるピアノ指導について—学生の自己効力感に着目して—、新見公立大学紀要、第36巻 (2015)、pp.59-66.

